読売俳壇

矢島渚男 選

鶴凍てぬ片脚立ちに身を載せて
水戸市　中崎　正紀

【評】一点を凝視した写実である。片脚で立ち頸を体に突っ込んで眠っているのだろう。正月の句はここに、事柄の句が多い。それらしく作った事柄の句は陳腐になりやすく、こうした写実の句を望みたい。

老いのなき長寿はあらず梅真白
吹田市　末岡たかし

【評】健康に長寿を保っていても、いつしか老いが忍び寄ってくるのが宿命なのだ、と自分に言い聞かせている。ことしの梅は大変早かった。

赤城は父大利根は母年明くる
群馬県　真下　忠男

【評】赤城山を仰ぎ見、利根川の流れを眺めて暮らす日々。大きな自然を父母として。

横座りしてるキリンの日向ぼこ
茨木市　瀬戸　順治

蕉翁も蕪村も貧し初暦
三木市　神沢　誠吾

雑煮食いその後日課の散歩なり
筑西市　枝　孚

芸術は狂気の欠片梅が咲く
日南市　宮田　隆雄

賽銭の両替をして初詣
東京都　家泉　勝彦

花八つ手斑に五人の孤老ゐて
東京都　田中　靖人

その女口づけのごと蜜柑喰ふ
川越市　伊藤　康昭

宇多喜代子 選

風貌の浮かぶ癖字や年賀状
横須賀市　大塚遊球子

【評】印字の賀状が多くなったいま、手書きの賀状が届いた。一目で「この字はあの人だ」とわかる一枚である。風貌のよさまでが伝わる。

正月の空の高さに大気吸ふ
西尾市　小笠原玲子

【評】正月の空の晴れは、快調な一年のスタートを感じさせる。青い空を見上げて、胸一杯に空気を吸い込む。気持ちのいい句だ。

初孫をまあるく抱きて初日の出
下関市　木嶋　政治

【評】初孫を可愛いとおもう気持ちが「まあるく」に出尽くしている。孫を可愛いとおもうのは当り前のこと。孫俳句が歓迎されないのはそれが過剰になるところ。

銀杏散るここより学徒戦場へ
狭山市　平野　和士

寒鯉のぐらりと揺れて泥けむり
越谷市　安居院康之

花筒の供華とぢこめて初氷
八尾市　仲谷加代子

寒柝や月が大きく附いて来る
京都市　根来美知代

新聞の雪便りより読みはじむ
東大阪市　山本　隆

事務始まずはコピー機オンにして
西条市　平井　辰夫

風邪に臥すたゞ天井の広さかな
春日部市　竹部　公子

正木ゆう子 選

シャッターを肩で押し上げ初仕事
東京都　本多　明子

【評】店舗の手動シャッターをガラガラと引き上げ、途中から肩で押し上げている。普通なら目を留めないほどのさりげない動作。新年の季語と取り合わせて、新鮮。

去年今年貫く母の看取りかな
匝瑳市　椎名　貴寿

【評】このような年越も多かっただろう。「去年今年貫く棒の如きもの」（高浜虚子）を拝借する遊び心で、大変さが少しでも和らぎますよう。

明星にあかつき侍り初御空
取手市　小日向教明

【評】金星探査機あかつきが金星の周回軌道に無事投入され、間もなく迎えた新年。探査機が侍ると思うと、何かわくわくする明星である。

二日には二日の予定それぞれに
桐生市　周東　孝一

舞ひ終へて肩に休める獅子頭
小金井市　高橋　広子

初暦その一日の暮れにけり
国分寺市　越前　春生

一歳に十二人向く年賀かな
相模原市　大谷千恵子

カート押し仕事始やリネン室
鈴鹿市　岩口　已年

年移る探査機は星巡りつつ
横浜市　平井　慶一

深海も成層圏も淑気満つ
宇陀市　泉尾　武則

小澤實 選

起重機の先端にある松飾り
さいたま市　薄井　逸走

【評】日本人はさまざまなところに松飾りを付ける。なんと高く伸ばしたクレーンの先端にも付けてあるというのだ。魔を払って、今年の高所での仕事の無事を祈っている。

ペーパーの語源パピルス白障子
東京都　後藤　博行

【評】紙という意味の英語ペーパーの語源は、古代エジプトの紙の一種パピルスまでさかのぼれるという。障子紙の白さに紙の歴史を思う。

保母さんに幼き恋の雪つぶて
名古屋市　可知　豊親

【評】保育園の女性の先生を恋して、気を引こうと雪礫を投げているのだ。なんという早熟だろう。雪礫の恋は類型だが、この句は新しい。

白き息鏡にかけて鏡拭く
松山市　久保　琹

初空の無辺の青を己とす
加須市　松永　浮堂

なまはげの隠れ煙草を赦されよ
秋田市　中村　栄一

水桶の凍りて鶏の啄き跡
太田市　阪本　和夫

天金にほのとほこりや冬館
長野市　小林　明男

鱈船の吃水深く着きにけり
千葉市　中村　重雄

ストーブや頭乾かす尻ふたつ
埼玉県　葛西　悦子